

# ゴリラとゾウから学ぶ！～生物多様性とビジネスのこれから～

「生物多様性」をテーマに、人間を客観的に見て、ゴリラやゾウを知ることによって新たな気づきが生まれることを期待する第10回環境シンポジウム「ゴリラとゾウから学ぶ！～生物多様性とビジネスのこれから～」が、昨年12月9日に大阪市内で開催された。公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団が主催。シンポジウムの模様は同財団YouTubeチャンネルでアーカイブ配信している。

## 第1部 動物の側から考える

総合地球環境学研究所 所長／京都大学前総長

山極 壽一氏

ゴリラは、オランウータンやチンパンジーとともにヒト科という分類群であり、遺伝子も人間と1・4%くらいしか違いません。今、アフリカ赤道直下にある森林地域の東と西に2つの種に分かれて暮らしており、東側は標高600〜4千以上の高地で、西側は0〜600mの低地です。

ゴリラの採食戦略は、低地では果実主体です。果実を探すために1日の遊動距離は長くなりますが、特定の場所を繰り返し使うので年間の遊動域は小さくなります。高地では果実が少なく、草や葉が中心です。1日の遊動距離が短くなります。



### 基調講演①

## ゴリラの社会は生物多様性によってどう変動するか？

オスがやってきてきて群れを乗っ取ることは、ほとんど見られません。しかし、群れ同士は、なわばりを持っていないため、たくさん群れが出会いを繰り返します。そこで、オスによる子殺しが起こることがあります。

ゴリラの社会生態学的特徴は、生息域が多様であることです。そのなかで、メスは所属集団やオスを替えることができます。その結果、多様な群れサイズと構成が生まれます。ゴリラには、外から

### 開会のあいさつ

公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団 理事長  
株式会社奥村組 副社長 執行役員  
小坂 肇氏



私も財団は、平成23(2011)年よりアジア・オセアニア地域における自然環境を守る小規模な活動に対して、11年間で38件の事業へ通算約1億円の支援を行ってきました。当初は水と緑をテーマにした活動が中心でしたが、環境問題の多様化に沿って、今は自然と人とのつながりを重視した活動に支援の力を注ぎたいです。

### 趣旨説明

総合地球環境学研究所 教授／財団環境事業選考委員長  
阿部 健一氏



生物多様性は、なぜ重要なのか。多くの方は「生き物がたくさんいることが大事」とおっしゃるかもしれませんが、それは確かに重要なことですが、もっと重要なのは、その多くの生き物がつながっているということです。どの生き物も単独では生きられないのです。そしてそのつながりのなかに、われわれ人類もいるということです。だから、生物多様性は、人類にとって大切なことです。

## 第2部 ビジネス・金融のトレンド

りそなアセットマネジメント株式会社

執行役員 責任投資部担当 松原 稔氏

りそなアセットマネジメントは、運用資産の大部分は年金をお預かりし、運用する長期投資家です。このため、2年ほど前から長期的にインパクトの大きい生物多様性の取り組みを進めています。このうち、活動事例として紹介するのが、サステナブルなパーム油の調達です。世界の投資家は自然の恵みがビジネスに直結するという観点から、アジア熱帯雨林の保護や管理への企業の取り組みに関心を寄せています。私たちは、日本の投資家として、このテーマで企業の活動を支援しています。



### 基調講演②

## 生物多様性と金融～長期投資家からみた期待と課題～

世界ではさまざまなインシアチブが立ち上がっていますが、一つ紹介したいものに、英国でまとめられた「生物多様性の経済学に関する最終報告」/「タスクアタレヒュー」があります。ごく簡単に言えば、現在、私たちのニーズを地球上で満たそうとすれば、地球が1・6個必要になるということです。でも、地球は1個しかありません。いかに利用を最適化させていくか、それが、まさに世界に求められていることであることを忘れてはいけません。自然資源を自然資本として見直し、企業が自然資源として利用するのはなく、どう共生を進めていくかを考える必要が迫っていると思っています。このような活動を続けながら、金融としての役割を今後も発揮していきたいと思っています。